

せ た か む い

発行 古平町史編さん室
文化会館 84212590
第202号 平成18-7-1

年表で読む

古平の歴史

[107]

畜産業

小家畜

◇養鶏②

鶏は農家や一般家庭の副業として、庭先などで放し飼いをしているのが多かったが、専業として飼育していたという記録がある。

大正年間に、浜町の平野梅吉が始め名古屋コーチンを飼い、次にオーピント、後に白色レグホーンを飼うようになった。産卵の成績が良かったので、多くの農家でも次第にレグホーン種を飼うようになった。

また平野梅吉は、当時としてはまだ珍しかった七面鳥を孵化し、

飼育していたというが、どのように販売していたかなどについては不明である。

古平町治要覧によると、明治四三年～大正八年までの飼育戸数・飼育数が載っている。

明治四三年

三〇七戸

一、〇二〇羽

同 四四年

二二三戸

七〇〇羽

大正 五年

六五戸

八二三羽

同 八年

八三戸

一、一五四羽

一時期減ったが、大正年代になると一戸当りの飼育数が増えているのは、農家にとって養鶏が有利な副業になっていたのかも知れない。

大正一二年の古平町治要覧では、浜町の阿部松次郎が鶏にアヒルの卵を抱かせて孵化させ、五十羽ほどを古平川尻で飼育していたというが、これもその後のことについては不明である。

◇うさぎ

うさぎについては、戦時中の記録がある。

昭和一二年、日支事変(後に太平洋戦争)が起きると、満州や中国北方での防寒用具として重要になり、軍用として毛皮・兎毛の供出が各町村に要請されるようになった。

当時としては何事も軍部が優先されていたので、町ではうさぎを供出するために家庭での飼育を奨励し、当時の政策でもあった「銃後奉仕」の一環にしようと、町内での毛皮や兎毛の集荷に務めた。

昭和一三年頃になると、これが各町村に割り当てられるようになり、増産を目標として国でも大いに奨励した。

毛皮用として白色改良種であるニュージランドホワイト・ベ

ルジャン・チンチラ、採毛用として白色種のアンゴラなどが飼育された。うさぎの飼育はあまり人手がかからないことから老人や婦人、学童らの労力を利用した。

古平小学校でも昭和一〇年頃まで、実習として女子が養蚕を行っていたが、軍用としてうさぎの飼育が奨励されたことから、廊下の一部にうさぎ小屋を付設し、実習を兼ねながら町の要請に協力した。

また、専業として飼育する人もいて、新地分教場(現在のふるびら温泉)下の竹村某はかなりの羽数を飼育し、子うさぎを希望者に販売もしていた。

町で購入するのは生後八ヶ月以上、生体重量六〇〇㍑(二・三㍑)以上で、皮を剥いたものを納入日を定めて購入した。酪連(正式名称は不明)では生体のままでも買い上げた。

買い上げ価格は一級(一円四五銭)～五級(五七銭)まであり、代金は納入月の月末に支払われた。これは終戦まで続けられ、また飼育現況調査も行われた。

▼二月一〇日

昨夜来からまた大吹雪となり、外出もできないほどだ。板戸を閉じている。吹雪の中、介おつかさんが訪ねて来られしばらく話をする。田店員新顔が来ていろいろ話した。吹雪は夜になつてもなかなか止まぬ。

▼二月二日

起床七時、洗面後、仏前にて読経する。一時間かかる。今朝も大変寒く木魚をたたく手が冷たくて痛くなるほどだ。今朝も吹雪いて海も時化。夜、中村床屋で散髪する。夜になつてから静かになり天気も良くなつてきた。

▼二月二日

雪がチラチラ降り寒さが厳しい。七時起床、今日も三〇分余り読経する。木魚をたたく手が冷たく痛い。店は刺網が少し出る。禅源寺に天竜という説教師が来て、父が聞きに行く。夜も読経をしたが観音経も大分上手になった。明日は花まわり、トミ子は花まわりを楽しむにしているのだ、いよいよ明日だ

と喜んでゐる。こうゆう時代は何の苦もなく実に無邪気な楽しい時代なのだ。

▼二月三日

今日は禅源寺の寺参りと花まわりの日だ。トミは二時間の授業でひまをもらつて来る。何日も前から花まわりに出るのを楽しみにしているのだ。私を残して、家族全員が花まわりに行く。帰つてからの話では

帰る。天竜説教師は占いのようなことばかり言い、露骨なことを言うので評判が悪い。

▼二月五日

祝聖会の例会日、五時起床、父は今日佐渡へ出発するとして四時頃起床、いろいろと支度をしている。五時二〇分私は出かける。禅源寺へ行つたら三番目であつた。五時四〇分から読経、六時半に終わり、しば

高野名幸作さんの日記から

当時の世相を見る

(113)

ずい分賑やかであつたとのこと。夜、学校で天竜説教師の講話があるので行つたが、何とも下品な話しぶり、あんな講話なら聞きに行くの

でなかつた。

▼二月一四日

起床七時、この頃は朝夕二回読経をやる。精神修養上確かによろしい。禅源寺で午後一時から寺参り、私も行く。読経、説教のあと禅学会の講話がある。四時夜食後、修証義を読経、講話などあり一〇時

らく話をして八時帰る。父は九時の富丸で出発された。願わくば道中無事ならんことを。

▼二月一六日

起床七時、父は今日はどこまで行つたやら。先日、犬殺しの件で過ちをした巡査は罰俸に処せられ、同時に木古内に転勤させられたとのこと。

▼二月一七日

今回の勤儉週間に祝聖会が鐘つきをやるということになり、今日

はその三日目で私の番である。五時起床、顔を洗い、支度をして五時半出かける、五時四五分から一五時間ほど待つて六時からつく。この間シバレがきびしく顔も足もビリビリする。六時になり、町中の消灯と同時に十分力をこめて一〇回ついた。朝早く起きて鐘をつくのはいい運動になる。夜、禅学会連中に、入船町の五太郎さん方で観音講の供養をするから参詣してくれとのこと。六時に行き、読経のあと酒肴の馳走があり、八時半帰る。

▼二月一八日

父からはがきが来る、一五日後五時余市発、一六日正午青森着、列車の都合で碓ヶ関に一泊、一七日午後九時新潟着の予定とのこと。起床七時、今朝の鐘つきは北浜君だ、私は床の中で聞く。今朝はずい分暖気になった。熊さんは平、鎌田、傘さんら四人で雪引きをやる。午後からはリンゴの袋張りをやる、今日五時から入船町本間タケ方で観音さんの供養があるので、寒修行連中が招待されて行く、六時から読経が始まる、観音経、修証義をあげる、赤飯など夜食の馳走があり九時帰る。暖かい天気だ。

▼二月一九日

先祖の命日で和尚さんが来られる。店はかなり忙しい、ユキちゃん是指を腫らして家へ帰っている。四郎はユキちゃんの家のことをアバエ(家)と言う。一日増しにキカナクなる。

▼二月二十日

先日、米山丸で佐渡(平)からツナギツラ四個、みそ一樽来る。外に、小田からみそ三〇樽送られて来た、困った。金子へ交渉してようやく引き受けてもらう。風邪気味で休む。

▼二月二日

寒い日だ。少し頭が痛い、風邪気味で早く休む。

▼二月二日

今日の寒さはこの冬一番だ、寒暖計は二四度F(零下四、四度C)まで下がる。店は閑散、例年なら今頃は少し忙しいのにこんなこともない。夜八時頃、佐渡の与平さんから老父が六時に無事に着いたとの電話が来た。安心した。今夜は近所の人達が集って賑やかなことだろう。

▼二月二三日

今日は台所で、家内中で袋張り、なかなか忙しい。私は袋の裁ち役を

やる。店は閑散、例年なら二月当初から三月中頃までは売り出し中のように忙しいのだが、こんなこともない。一般に不況なんだろう。新聞によれば各地で大火がある。釧路の西幣舞で一八〇余戸、小樽富岡町で三〇余戸、増毛で二〇戸、今頃火事にあつたらどんなに困るだろう。火の用心が大切だ。

▼二月二四日

天気快晴、そして暖気、春らしい。漁夫の先発隊が今日から入り込む。町は賑やかなる。郵便局には漁夫が大勢やつて来ているが、国許へ無事到着を知らせる電報でも打っているのだろう。これからは一日増しに忙しくなる。私は袋の裁ち役でなかなか骨が折れるが、だんだん慣れて上手になる。妻とイソさんは、午後から挨拶かたがた新地方面へ行く。

▼二月二五日

起床八時、朝夕は余程日も長くなり春らしくなった。漁夫も盛んに入り込み町も賑やかになった。店は相当地に忙しく、現金一〇〇余円あつた。今日も相変わらず袋張りであち中一生懸命だ。私の裁ち役もなかなか上手になった。

▼二月二六日

袋張りでなかなか忙しい。漁夫も続々入り込み賑やかだ。夜、困支店から泰ちゃん、八木さんが手伝いに来てくれる。謡など歌って賑やかだ。

▼二月二七日

今朝は寒く、朝の寒暖計は二五度F(零下四度C)、硯の水も凍っている。一日中袋張り。漁夫も九分どおり来たようだ、困漁場行きの荷物、行李などが来る。店は例年にくらべていたつて閑散だ。新地、主人死亡したとのこと、不幸続きだ。夜、支店の湯に入りに行く。

▼二月二八日

昨夜からの大吹雪、板戸を閉めていたが九時頃からだんだんできいた。今朝も寒暖計は二五度F(零下六、五度C)で寒中の如し。母の命日で和尚さんが来られる、私も読経する。今日も袋張り、夜、土谷さんが来て袋の裁ち方、のりづけの仕方などについて話す。

▼三月一日

今日は祝聖会の例会日、午前五時起床。寒いこと寒中より厳しい。五時三〇分出かける、まだ暗い。三人目であつた。五時四十分から読

経が始まる。六時半終わる。この朝の寒いこと、今までこんなこともない。手も鼻も痛いくらいだ。二月中よりひどい。八時半帰り朝食、店は閑散、例年今頃は少し忙しいのだが休業同様だ。袋張りなどやる。

夜、主人の通夜に行く。よい夜だ、九時帰る。寒さが少しゆるんできた。

▼三月二日

天気快晴、暖気で春らしくなった。店は少し忙しくなったが、例年よりまだヒマだ。圃の葬式を送りに行く。漁夫も九分どおり入り込み町は賑やかになった。夜、袋張りをする。

▼三月三日

起床七時、店は閑散だ。午後一時学校で支庁吏員の林業講話があり行く、一般造林と外に桐の植林についての講話がある。桐は将来有望なので大いに植林すべしだ。古平の漁港、鉄道敷設、道路、古平川の地方費編入など運動のため、町長、大澤道議、困主人等が札幌へ出張する。

▼三月四日

起床八時、今日はかなり忙しい。一一時半の外浜丸で、弥吉さんと

元^①にいた由松さんが来る。鎌場で稼ぐとのこと、いろいろと話をする。二時から八時頃まで話し夜食を出す。

▼三月五日

起床七時、時々吹雪、寒さが厳しく寒中の如し。鎌場が来たというのに少しも春らしくない。店は例年よりヒマの方だ。夜は家中で袋張り、私は七時から田で部落会例会があり行く、役員改選の結果、吉吉野さんが新しく入った。九時帰る。

▼三月六日

昨夜来の大吹雪は、実に今冬一番のひどいものだ。町は雪が一尺も積もり寒さも厳しい。由松さんが積丹へ陸行する。弥吉さんが遊びに来て、いろいろ佐渡の話などする。

▼三月七日

起床七時、雪が降り、寒さが厳しく寒中の如し。店も例年なら忙しい時期なのに、閑散としていて驚くほどだ。午後一時から、沢江の毒マシジュウで死んだ子供二人の三十五日が、禅源寺主催で追悼会をやるので行く。二時から始まる。会員一同修証義をあげ、五時帰る。

▼三月八日

起床七時、寒さは相変わらずひ

どい。硯の水も、流しの水がめも凍る。寒中でもこんなことが無かったのに、この頃はかえってひどい。帝国議会普選問題、衆議院は通過したが、参議院ではまだ通過せぬ。何分にも大問題である。

▼三月九日

雪は降るが寒さは余程ゆるみ、寒暖計も三六度Fでしのぎやすい。店は閑散。幸治から一ヶ月ぶりではがきが来る、一二日から一五日まで入学試験、一六日から二十日まで学期末試験、二一日から休みなので帰省するときは、昨年は入学試験などと言っていたが、早一年が過ぎ早いものだ。夜は袋張りをやる。近頃ではしのぎやすい日だった。

▼三月一〇日

天気快晴、どこも鯊漁の支度で忙しい。刺網連も畑の奥から家が移つて来る。今日は少し暖気なので、子供等は浜へ遊びに行く。

▼三月一一日

暖気が続きよい。店は閑散。幸治は一六日から試験とのこと、好成績で進級を祈る。二一日帰宅することだ。

▼三月一二日

今日も暖気だ、寒暖計は三六度

F(二二度C)、しのぎ易くなった。

店はわりと閑散。熊さんは畑へ大根とイモ掘りに行ったが、五尺も雪が積もっているとのことだ。鎌場支度もだんだん準備もでき、一五、六日には網下し、一八、九日には投網するとのこと。向かいの電気会社の高橋さん夫人、不快とのことで見舞いに行く。

▼三月一三日

父は佐渡へ行き、久しぶりで皆さんと対面して喜んでることならん。その後の便りは無い。だんだん暖かくなるが雪はまだ深い。

▼三月一四日

普選問題も衆議院を通過したが、貴族院はまだ通過せぬ。なかなかやまらしいことだ。今夜、^②困の風呂行く。

▼三月一五日

祝聖会例会日、五時起床、五時二〇分出かけた。町は早薄明かりになった、先頃から見れば余程明けけるのが早くなった。読経後、例により和尚の部屋で話し、帰ったのは七時半。

▼三月一六日

起床七時、割りと暖かい。今日は吉日として網下し祝いをやる家がた

くさんある。四郎を連れて浜へ出て見る、日の丸や五色の旗などを立てて景気がよい。高橋さんの夫人、その後も不快にて小樽の病院へ行かれた。

▼三月一七日

この頃は寒暖が常ならず、気候不順のため風邪の人がポツポツある。私も二日ほど前から風邪気味だ。熊さんと高太郎さんは雪引きをやっている。新聞によれば、忍路の建場で鯊四〇尾ほどとれたとのこと。で活気づく。夜に入り風が吹き、荒れ模様になった。

▼三月一八日

今日も一日中時化、建網もこの分では建てられぬ。

▼三月一九日

過日、衆議院へ請願書を出していた古平漁港と、積丹半島鉄道問題が衆議院で採決されたとのこと。めでたいことだ。今後の運動もいっそう激しくせねばならぬ。熊さんはリンゴの枝切りに行く。

▼三月二十日

起床七時、毎日の時化続きでまだ投網もできぬ。今日、^③越中社長さんが、寿原さんの娘さんとの結婚式で招待される。美登利支店

で披露宴だ、八時に行く、ずい分待つて一時に始まる。立派な式だ、午前二時に終わる。

▼三月二日

ようやく天気も快晴となった。海もナギで建網連は型入れした。正午頃、四郎を連れて浜へ行く。発動機船七、八隻も型入れて忙しそうだ。カレ網が帰って来たがたくさん掛かっている。幸治は二時の富丸で来るので子供等は大喜びだ。この日で建網も皆建てたようで、明日は少しは漁があるだろう。

▼三月三日

時化で寒風、チラチラ雪も降りまた寒中のような。昨夜、建網も初めて建て揃ったようだ。聞けば今朝、種金で五、六モツコ、①一モツコ、刺網二、三〇尾獲れたところもあるとのことだ。本年の当地での初漁だ。魚体は大きく成熟しているとのこと。午後からますます時化になり揚網する。

▼三月三日

時化のため揚網したので、今朝の漁はなし。新聞では美国、余市で五六尾あて獲れたのみ、古平では全部で三〇モツコ獲れたので一番漁だ。一等一二円に売れたとのこと

だ。今日はだんだん風もなくなり静かになったので、夜は皆建て揃いで浜は賑やかだ。明日は初鯨食へられるかもしれない。今日は小学校の卒業式、文治とトミは優等賞を貰ってきた。③嫁さん、今日挨拶に来られた。

▼三月二日

快晴で上ナギ、④積丹漁場行きのサキリ、米などの積み込みに忙しく熊さん、高太郎さん等が手伝いに行く。建網は皆建揃い、刺網も皆出た、今夜はひと漁あるかも知れぬ。

▼三月二日

子供等は学校が休み、幸治も小樽から来ているので、家の中は一五人の大勢だ。熊さんは裏の雪消しをやっている。店は閑散、建網も刺網も今朝は漁は無し。暖気となり雪もだんだん消える。寒暖計は四〇度F(四、四度C)だ。

▼三月二日

起床七時、昨夜は雪が降り二寸ほども積もる、また寒中の如し。午後から青空も見えて海もだんだんナギてくる。夕方には上ナギで、建網、刺網共に今夜こそと浜は賑やかだ。佐渡赤泊でアバ大暴落と商

店から通知がある。一円一〇銭から一円三〇銭、改良で二円五〇銭。

▼三月二日

ボタバタ雪が時々降り、冬のようだが暖気、就寝中に⑤浜で石油箱に鯨を入れていた注進があり、六時に起床して見に行く。外に群来村熊木で磯舟一杯、種金が少々獲れた、刺網は五、六尾、多くて一モツコぐらい、ほんの初漁だ。この日⑥から二尾、澤田五尾、石岡七尾、合計一四尾貰い、昼に初鯨を食べた。大型でこれからの大漁を祈る。町内でも初鯨を食べたのはまだ二、三分か。夕方浜へ出て見る。

上ナギで、建網も刺網も今夜こそはと元氣よく出て行く。浜もようやく賑やかになってきた。

▼三月二日

昨夜から鯨漁なし、起床六時、昨夜の様子では、今朝はひと漁あらんと考えたが無。四方の山も真っ白な雪で、まだ早いようだ。吹く風の寒さからしてもまだ早い。四月一、二日ごろから獲れるかも知れぬ。幸治、昨日から風邪気味で氷枕をしている。庁商から幸治の成績表が来る、平均点八六点で、二四五人中一二番の成績だ。先ずは上の方

だろう、数学と英語は一〇〇点と九六点だった。

▼三月二日

今日は近頃で一番の暖気、寒暖計は四五度F(七、二度C)まで上り、こんな暖気が続くと雪もドンドン解けるが、今まではずい分と寒かった。コノさん、ソイさんと子供等が、△の浜で海草とりに行く。上天気なので楽しいだろう。妻は加瀬さんの子供が亡くなったので手伝いに行っている。

▼三月二日

大吹雪、大時化になる。昨夜の様では、今朝は漁があるだろうと早々に起きて見れば、意外や意外、辺り一面の銀世界、雪はなんと四、五寸も積もり冬だ。雨雪で電線にベタバタつき棒のようだ。海岸へ行って見たが、にわかの時化で建網も刺網もゆるくない。多くは△、種金の浜の方へ避難した。加瀬さんの四歳の子供が死亡、可愛そうなことだ。妻は葬式送りに行く。幸治は今日も休んでいる、あちこちで風邪があるらしい。

町内の学校探訪

群来尋常小学校

江戸末期の旅行記に「ふるびら場所少しばかり行くと、へろカロウシ、なまってヒロカロイシという。アイ又小屋二軒、番屋、二八小屋あり、船のかかり潤よろし、丸山崎があり烽火場がある。」と記されている。

そして季節はちようど春、群来村辺りから眺めた丸山の景色を

「えみし住むところなれども古平の浦めずらしくさく桜かな」と詠んでいる。

群来村は、鯉の押し寄せる早くからの干石場所でもあった。

群来町は鯉の好漁場として早くから開けたところで、古くからへろカルウシ・ヒロカルウシなど表記の仕方はいろいろで、元の名は「へろクカルシ」鯉の群来るところという意味とあるが、古平の人達の呼び方も微妙に違う。一般に群来村(町)と呼ぶようになったのは昭和二〇年代以降のようである。

明治二年、蝦夷地が北海道と

改称し、これまでの古平場所が古平郡となった。郡内には沖村・歌棄村・沢江村・浜中町・湊町・入船町・丸山町・新地町・群来村の九町村があり、群来村は、海岸近くから山の斜面にかけてすでに人家がかなり建っていた。

群来村は安政の頃から鯉漁業者がかなり定住していて、明治五年の古平郡内の人口調査では、戸数 一三九戸(神社一・寺一・

本陣一・家持八九・借家三一・出稼者の家一六)

人口 四四六人(僧侶三人・男二二四人・女二一九人)

年代別では一四歳以下九九人・六〇歳以上十一人(外は省略)と、当然のことだが若い年代層の移住者の多かったことが分る。

学齢の児童は浜中学校に通学しなければならなかったため、特に冬期間は通学に困難なこともあった。明治二〇年頃、群来村の一戸熊太郎は、子供達を集め読み書き・そろばんなどを教えてい

たという。

明治二十一年、学校敷地として五五坪ほどの貸し付けを受けたが(現在の温泉側から切り通しを抜けた辺り)、ここに学校は建設されなかった。

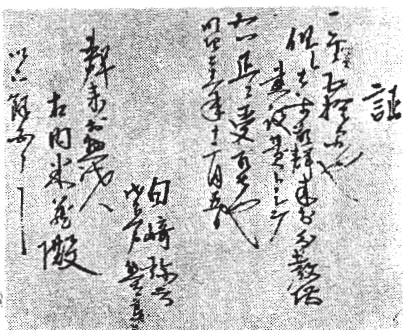
明治二十一年、新地小学校が創立されると、翌二十二年、現在は廃社となった群来村恵比須神社鳥居下に、一学級の新地小学校群来分教場として創立された。

当時、学校建設費は地元(古平郡)が負担していたので、費用は部落民からの寄付金や、群来村惣代人からの一時的な借入金などによるものであった。

寄付金に対する次のような領収書が残されている。



→神社下に学校があつたが現在は草に被われ大きな建物の礎石だけが残っている



証

一、金五拾円也

但シ古平郡群来村分教場

建設費トシテ

右正三受取候也

明治二十二年二月五日

白崎彌吉

代印 一戸熊太郎

群来惣代人

相内米藏殿

以下余白ノ事

教員には一戸熊太郎が範と改名し、授業生に任命された。単級なので教員の任命は一名だったが、奥さんが代用教員として裁縫などを担当していた。

明治二四年、群来小学校は新地小学校と共に、浜中尋常小学校の分校となった。また、分教場という名称は分校と替った。

その後、高等科を設置した浜中尋常高等小学校は、明治三六年九月、古平尋常高等小学校と改称したが、群来分校は独立して群来尋常小学校と改称した。初代校長には太田金太郎が任命された。在籍は、男子・女子共に一四名で計二十八名を数えた。

明治四二年には約一五四坪の

敷地に、平屋建ての一教室を増築したが、後にこの土地が種田銀作の私有地であることが判明し、この土地の寄付を受けた。この寄付によつて、種田銀作は賞勲局から賞状と銀杯が与えられた。

大正六年には、在籍児童数が五五名と開校中最高の児童数となつたが、その後は次第に減少し、同一二年には四二名となり、その年の卒業生は男子三名・女子四名の計七名であつた。

←尋常小学校当時の児童との記念撮影



同年一月の町会に、群来尋常小学校を廃止し、新地分教場に統合の案が提出されたが、群来村住民からの陳情もあり、また住民感情から、今後三年内に統合の準備を進めることになつた。

大正十三年一月の町会に「小学校合併の件」が提出され、群来尋常小学校を統合することに決定した。通学するのは新地分教場で、その理由として、「通学区域ハ新地分教場ニモ近く、通学上カエツテ便利ナ面モアリ、マタ、町トシテ教育費ノ抑制ノタメデモアル」としている。そして、校舎は群来村の住

卒業證書

相内トサ

尋常小学校ノ教科ヲ

卒業シタルヲ證ス

明治四十五年三月二十日

北海道群来尋常小学校校長 豊田 啓

第四號

民に無償で貸与されることになり、昭和二年に群来村自彊団(じきようだん)青年団に付与された。

一方、新地分教場の建設に當つては、群来尋常小学校の統合に ついても考慮し、新地町と群来村との中間地点に決定した(現在のふるびら温泉駐車場)。改築中の本校の古材で校舎を新築中のところ、一一月に新地町中ほどの山側にあつた現校舎が類焼してしまつた。新校舎は一二月に落成し一四日から授業を開始した。開校以来勤務していた一戸範は閉校の時に校長であつたが、統合により退職した。

矢車草の記

大 澤 文 子

本州各地の梅雨もあけ早朝から太陽がカツと照りつける、あー北国にもやっと初夏が……と躍動感に心がうずく。背にうける日ざしもつよく、私をせきたてる何かがありそう。

なんと言つても私は真夏の花ばなが大好き。炎天下、真紅の強烈な色の花々を垣根越しにのぞき見るのが大好き。

青紫色の花が多く咲き乱れる頃には何故か海を恋しくなる。なんといつても私の想い出の花は矢車草であらう。今年はいよいよ種子を求め日当りのよい個所に植えてみよう……とひとり気負つてはいるが。矢車草といえは歌人「石川啄木」の短歌にもよくうたわれ、広く世に知られている花であらう。

いま思えばあの頃、教職にあつた父の転勤により私共家族

は、新潟、佐渡、札幌……と三年間引つ越しが続いた。やつと札幌師範学校の近くの南大通り西十九丁目の住宅に居を構えたのは、大正十四年の春であつたろう。

私と姉はその時、附属小学校の三年生と五年生に編入した。あの頃、母は疲れきつた顔を見せ、まだ解かないままの引つ越しの荷物に寄りかかり、

「ああ、箆笥も戸棚もなんにもいらないよネー」

と、そつと愚痴をこぼし私の肩を抱いたのを覚えていた。私は分からないまま、少しやせ気味の母の顔をそつと見上げたのだつた。

新潟生まれの母はあれから北海道の寒さに耐えかね冬になると、いつも指の輝になやまされるのだつた。

六畳の茶の間の柱に寄りかかり、ひびわれし痛々しい指に軟膏をつけ、赤く焼いた火ばしで「あちち、あちち」と言いながら治療をしていた。

子供心にもかわいそうで見えられなかった。お手伝いも出来ずただ母の側に座り、ジュウジュウと軟膏のやけるかすかな音に耳を貸しているのみ。

居を構えた札幌の住宅の裏庭は大分広い草地であつた。花好きの父は勤務からもどつてくると、早速服をとりかえ、引つ越しの時の板などをつかい、盛りあげた土を四角に仕切り、花を植える準備をはじめた。姉と私は花の種を買いにゆく父に連れられ、街角のこじんまりとした花店にいった。どんな花を……と父の手元を見てみると、やつぱり矢車草の種の袋を選び二袋も求めていた。コスモス、百日草、スイートピー、金盞花の花種も買い、うれしそうな父の顔を今でも思いだす。

土曜、日曜日になると父の受け持ちの学生達が賑々しくわが家へ来られ、父の花畑の手伝いもしてくれたが、夕方近くにな

ると六畳の茶の間に集まり談笑がつづく。

母は幼ない弟をねかしつける、台所と茶の間の間をいつたり来たり、学生さん達の接待にいそがしい。でも一緒に学生達の談笑の仲間に入りこみ結構楽しそうに見えた。

私と姉は茶の間の隅っこにある座り机にむかい合せて座り、学校の宿題に余念がなかったことを覚えていた。今思えばあの学生さん達の爆笑など続くあの部屋で、姉と宿題をよくこなししたもの懐かし、今宵学生さん達との写真を眺めていたのだつた。

父は母の誕生日にわざわざ京都の染め所へ依頼し紵の帯を贈つた。大好きな藍紫の矢ぐるま草を二輪、白地の紵に散らしたものだつた。

やせ型の母によく似合い子供心にもうれしく、私と姉は母のあとを追ひ、紵の細くすきとおつた生地を、そつとなぞつてみたりしたあの頃……。

今でもまざまざと目に浮かぶは……うれしそうな、そして控えめな母の笑顔だつた！

古平と私

二、お神輿への祝儀

葛 西 庸 三

現職の時、後志管内の十三か町村に勤務したが、その地その地には歴史と伝統のある独特な祭りがあった。

規模は異なっても、子どもから老年寄まで参加する地域ぐるみの大きなイベントであり、そこには祈りと喜びと安らぎの貴重な文化が育っていた。

忘れ難い祭りは幾つかあるのだが、一番華麗で豪壮な祭りは古平の琴平神社の祭典であり、次は寿都神社の祭りであった。

共に鯨漁で栄華を極めた歴史と伝統と文化を持ち、その流れは脈々と引き継がれていた。

私が家族と共に琴平神社の祭りに初めて出会ったのは昭和五十三年の七月であった。十日が宵宮で十一日が本祭りだった。

今年三十九歳になる息子は古平

小の五年生で、生まれて初めて町内会の子ども神輿に参加した。

孫を連れて遊びに来る度に、

「古平の祭りの時、『ドットコセー

ノコリーヤ、ヨーイトナー、アッ、

ドッコイシヨドッコイシヨ」と、

掛け声をかけながら神輿を持ち

上げた風景が忘れられない。懐かしかった」

と言う。祭りの情景が今なお鮮明

に、息子の心の中に生き続けている

のだろう。

また祭りの時には、ニセコ町に住

んでいた母を呼んだ。八十七歳に

なっていたが比較的健康だった母は

喜んで来た。

母は座椅子に腰をかけながら、

燃え盛る「燵」の中を火の粉を蹴散

らして渡る勇壮な天狗や、怒涛の

勢いで真っ赤に燃える「燵」の中を

突っ走ってお神輿の本体を、顔の太い

皺を赤く浮き出しながら真剣な眼で見ている。

火渡りが終わって家に帰ると、

「ああ面白かった。古平の祭りはいいね。これで長生きできるよ」と、

母は満足そうに繰り返した。

さて、お神輿の休憩所は所要

所にあつたが、古平小学校もその

一つであつた。

退職後は古小牧市に住まわ

れて、昨年亡くなられた田中仁先生が

机や椅子を並べ、お神酒や飲み物

などの用意をすべてされた。有難

いことであつた。そして、お神輿が

来たら「祝儀を包んで差し出すの

が恒例だから、あなたも用意する

ようにと言われた。

だから前の晩に妻に相談した。

今までもお神輿に「祝儀を包んだ

ことはあつたが、どこも数が少な

かつた。色々と考えて神社と町内子

ども会のお神輿には二千元ずつ、

他は千円にしようと決め十枚ほど

「のし袋」を用意した。

本祭りの日の朝、お神輿が威勢

よく校門の坂を駆け登ってくる。

妻が用意した「祝儀袋は瞬く間

に無くなった。お神輿はどんどん

くる。妻は住宅に走り「祝儀を用

意する。それでもすぐ無くなる。妻はまた住宅に走る。なんと「祝儀袋は三十枚以上も出ていった。

その頃の私の本俸は二十六万円

ほどで、いろいろ差し引かれると手

取りは二十万円くらいではなかつ

たか。それに倶知安に下宿してい

た娘への仕送りもある。家計は楽で

はなかつたはずだ。だから、急に

出た三万円という祭りの「祝儀は大

きかつたと思う。

しかし妻は、「息子も母も私達も

楽しんだお祭りだも、よかつたね」と

言つた。私は安堵した。

翌日、学校でその話をしたら、

「まあまあ気前のいいこと。普通は

二百円か三百円が相場なんだよ」と

田中先生は笑つた。なんだ、そう

だつたのか。と私の心は納得した。

また、その話を妻にすると、

「いいんでないの。神様が喜んでく

れたんだもの。でも来年は考えな

くちやあネ」

と最後は小声になつた。

次の年、私と妻は心の中で神様に

詫びながら、神社と息子が出る町

内のお神輿を除き、ほかは世間並

みの三百円の「祝儀にした。

町から町へ

今月は古平町を

Ⅱ後志教育局が発信する

五十年前の古平Ⅱ

古平小学校の前庭は実によい。深々とした一むらの木立は得難いものである。開校八十年を迎えんとする歴史にふさわしく、プラタナスの古木など全く見事である。

この古平小学校にまた一つの名物が出来た。

俳人・高野素十の句碑である。古平町開町七十七周年記念に、同窓生で、現在同校PTA役員の水見さんが幹旋の労をとられたもので、素十はホトトギス派の著名な俳人で、奈良医大の教授と聞いているが、先年、古平町を訪れた縁もあり、同氏の嘱に応じられたという。碑には

ふるさとを

同うしたる

秋天下

素十

とあり、樹間に横たう巨岩に刻まれたこの句碑は、古平小学校の永い歴史にふさわしく、また町の名所としても立派なものと言えよう。

素十は、句碑は残さない主義の人だと聞いているだけに、古平町関係者の喜びはより大きいわけである。

同じく古平町には、あの五百羅漢で有名な禅源寺の境内に、俳人・野村泊月の句碑もある。二六、七年前(昭和の初め頃)に来町されたということだ、

蝦夷の古都

古平濱の盆の月

泊月

という一句である。

由來、古平は句会の盛んなことで全国的に知られており、斯道に志す人々が来道の折には、よくこの町を訪ねるということである。

文化の日にふさわしい話題として、管内に広くお伝えしたい。

× × ×

古平町の婦人会は実によく活動しているようである。現在町内には古平婦人会(浜町方面を主にし)、みなと婦人会(新地方面を区域とする)の二つがある。それぞれ特色のある活動を活発に行っているが、地域的にみても一本化するよりこのほうがかえって、良いように思われる。

婦人会の場合、何時も困難するのは経費の問題であるが、みなと婦人会などは地域に呼びかけ、婦人会で幹旋のものを購入してもらい、この収益と映画会の収益などが大部分で、貯蓄組合もすでに五十万円を突破しているというが、うまく成功している例として推薦できる模範的な婦人会であろう。

月の二〇日は常会で、一二〇

人の会員の出席率もよく、青年団との連絡が非常に密接で、互いに助けつ助けられつ、住みよい郷土の建設にはげんでいる。

近くもとの新地分校の古材で新地集会所を建設することにな

っているが、これは永年、婦人会、青年団の待望事項であっただけに、これが完成した時は活動はいっそう盛んになることが予想される。

× × ×

宇須井教育長さんは、昨秋病まれ、その後健康も回復されて出勤しておられたが、先月初旬に再発、目下、絶対安静を守っておられる。再起の日の一日も早からんことを切に念じて止まない。

× × ×

古平中学校の校舎のことについては、すでに「存知の通りであるが、目下、屋体を新築中で、見事な基礎工事にまた特色があるようである。古平町役場の庁舎といい、何か建築については、一歩進んだ意見を持っている町関係各位に敬意を表せざるを得ない。

この学校の校長室、応接室も立派なもので、おそらく管内随一であろう。

(昭和二十九年十一月一日「後志教育情報」掲載、各町村の教育情報を紹介 Ⅱ 後志教育局)

食

むかしのことを 思い出しながら

玉 谷 美 都 子

心地よい季節に誘われてか、札幌から二人の孫達が遊びに来ました。

「よく来たネ、元気にしてた？」
会話もそこそこにフキを採りたいのだと言う。お天気もいいし、ではどこに行こうか。近くのところへ行くとエソエンゴサクの花に目を注ぐ。

ふと、五十数年前のことが頭をよぎる。甘いものの少なかった時代、よくこの花の蜜を吸ったことを思い出し、昔のことをいろいろ話し孫達にも体験させました。すると驚いた顔で、

「うー、この花あまいネ！」
そういえば、子供の頃はミツバナなどと言っていたッけ。

昭和二十五、六年頃からの食べ物のことを思い出してみました。毎年、春になると山菜採りを

し塩蔵して蓄える。ちょうど今の家族旅行村の辺りに畑があつて、そこにはじゃがいも、かぼちや、とうきびの外、すいか、いちごなどいろいろ作っていて、家の周りにもトマト、なす、きゅうりなどあつて、主食のお米や干うどんなどの外はすべて自給自足、じゃがいもやかぼちやは主食にもなっていました。

赤イモはさましてからすりつぶし、イモもちにして砂糖しょう油をつけて食べましたが、美味しかったし、あの素朴な味わいは今でも懐かしい。

沢江の中町に川畑商店がありましたが、その近くにじゃがいもの収穫時期になるといもすり機が置かれていて、多くの人が交代で使っていました。でんぷんをとった後の残りがすにでんぷんを

加え、それを丸めてしょう油汁などにしていました。

沢江の浜は魚介類も豊富で、ウニ、アワビ、ヒロ貝、ナマコなどと昔はとり放題、浜では焚き火をしてそれらを焼いていましたが、時折折行つて見てはおすそ分けにあずかつたものです。その時の味は今でも忘れません。

夜になると、今は無くなつた沢江の橋から川にかごを入れて、川ガニを獲る人もいました。

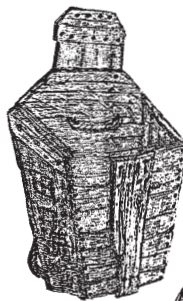
とにかく一日中、あくせくとして食料の調達に一生懸命な時代もありました。
春になると鰯が来て、沢江のモッコ岩の周辺には鰯を積んだ船が入り、それを待つていたモッコしよいの老若男女であふれるような賑わいでした。浜にこぼれた鰯や、モッコの中に残つた鰯をいただくのも子供達の楽しみでした。

一般の家庭では鰯を塩漬けにして、家庭で採れたいろいろな野菜類を入れてコトコトと煮る三平汁は、郷土ならではの格別の味でした。あの美味しかったこと、今、同じように作ってみてもなか

なかあの味は出ません。

食へることで精いっぱい時代、苦勞して育ててくれた両親へ感謝せずにはおられません。めぐり巡つて今我が家の周りでは、あの頃の親の背を思い出しながら野菜作りをしています。

日常的に使われていた三平皿(さんぺさう)
↓
もつ出番のなくなつた? モッコ



折にふれて、当時のことが走馬灯のように次から次へと浮かんできます。

さて次の日、孫達とのお別れです。

「元気でネ、またネー」

エソエンゴサクの蜜を吸つて、「あまいネ」と言ってくれた現代つ子の後姿を見送りながら、「ありがとう……」

と、そつとつぶやく、うれしく思う春の日のひとときでした。

老兵の綴り方

あゝ樺太国境守備隊

橋 義 春 [遺 稿]

八月十七日〔晴れ〕
逃避行を続け、八方山へ
到達するゝ続き

で作った掘つ建て小屋が一軒建っている。

その掘つ建て小屋には何か食べるものがあるかも知れない。行ってみよう。中へ入って見たら、それはどこかの中隊の作業小屋だったらしく、毛布の梱包したもの、沢山積んであり、品物が散乱している中に軍服もある。私の軍服は泥に汚れていてよれよれなので、早速、新しい軍服に着替えることにし、ついでに下着も新しいものに取り替えた。

川のほとりには軍用トラックが一台放置され、拾田札が山ほど焼かれてあった。そのすぐ傍には将校用の行李も開けられ、本と紺の着物、長靴などが投げ出されていた。川で顔でも洗って来ようかと川岸に行ったら、もう一つの軍用トラックが流れに引つ掛かっていて、鍵は片方だけが掛かっている。何が入っているのか興味があった。ひよっとしたら、札束でもぎつしり詰まっているのかも知れないななどと考えていたら、曹長がそろそろ出発しようと迎えに来た。

十人でそろそろと軍道を歩いていた。遙か八百メートルぐらい先の谷間となっている辺りから急に銃声が聞こえてきた。それは聞き覚えのあるソ連軍の自動小銃の音だ。相手は相当の人数のようだ。こちらは上から見ているので、木が生い茂っていて、相手からはこちらの姿が見えない。

「バリバリ、バリバリ……」という激しい音のする方から、うつつらと青い煙が上がっている。あそこで戦っているナ、ということはわかるがどうすることも出来ない。

一中隊か、或は七中隊か、苦戦しているのではなからうか。激しい撃ち合いがしばらく続いたが、いつの間にか銃声は止まった。相手を制圧したか、それとも味方が？ どちらかであろう。これが戦争というものもの現実だ。

林の中を歩いていたら、師団司令部から来たという下士官を長とする伝令四名に会った。師団司令部から出された重要な命

令を持っていたが、幾つもの山越えをして来て相当に疲労していた。山の中に将校用の馬が五頭ほど放し飼いになっていたのを見つけたので、それに乗って行くことにした。鞍もあちこちに散らばっているのをかき集め、私も鞍の取り付けを手伝った。

(後になって分かったことだが、この人達は、師団司令部からの停戦命令を持って来た伝令であった)

しばらく歩いてやつのことで、八方山の連隊本部に到着することができた。同行の曹長に厚く礼を言い、私達は水田軍曹の元に合流して連隊本部の指揮下に入り、直ちにタコつぼを掘って戦闘態勢に入った。

夕方になって、敵戦車が八方山の稜線に姿を現したが、わが軍の火炮がこれを撃退した。夜になると敵の曳光弾が青白い尾を引いて、何条にも火花のように飛んでいるが見える。

—— 続く ——

ブラブラと坂道を上って行ったら、やがて下の方に川が流れているのが見えた。師走川の上流かも知れない。川岸にムシロ

女ながらに一打一打の確かにて春の大地に杭いくつ打つ
庭の辺に垣根補修の杭うてば堅きが牀の芯までひびく
爽やかに汗は流るる穴掘りて池端の杭ひとつ治まる
子雀が木の葉のごとく舞ひおりる春の朝の土の輝き
光りつつ青木の若葉伸びはやし去年の垂るる葉折りをり落つる



瀧内 優子

寄せ置きし枯葉の下に冬越えて紅の潤ふ楓のもみぢ葉
頻りなる萌えに励みの兆し来て庭の冬越えし芥集むる
箒目たちてひそけき庭の面に春の朝の小雨降りつつ
力仕事終へて掌の内違和覚ゆ箒うごかせば指ぎこちなし
新しき軍手おのれの掌になじみ右と左の形をなせる

私の家の上の子が、小学六年生
になつて間もない五月末頃に、小
樽へ初めての修学旅行がありま
した。

戦後も八年となり、食糧など
もあまり不自由さを感じなくな
つており、昼食の弁当も娘の喜び
そうなものと思つておりました
が、あいにく産後の肥立ちも浅い
私にはこれということも出来ず、
娘に詫げる思いでゴマしおの

ゴマしお おにぎり

池田 テル

おにぎりを持たせました。おに
ぎりは好きな娘でしたが、今日
は友達と一緒に食べるので、何か
引け目を感じるのではないかと
思つておりました。

修学旅行への見送りも出来ない
まま、六年生全員の無事を願ひ
ながら、帰つてからのみやげ話を
待つていました。

やがて帰つて来た元気いっぱい
の娘の顔は、楽しかったことを物
語っているかのようにでした。私が

気になつてた「ゴマしお」のこ
とは一言もなく、夕食後も旅行
の話が続いて、いつものように寝
につきました。

翌朝になつて、娘が突然思い出
したように、
「かあさんのおにぎり大きかった
し、二つあつてよかつたよ。お昼を
みんなで食べてたとき先生が来
て、『弁当の多い人いないかなあ』
つて言うの。先生が食べるのかと

思つて上げたたら喜んで、帰りの時
も『ありがとう』と言われた」
とのことでした。

後でわかつたことですが、その
日は気温が高かつたので、ご馳走
のようなものは味が変わつて食べ
られなくなり、そのおにぎりが
少々なりとお役に立つたとのこ
とでした。

簡単に長持ちするゴマしおお
にぎりのこと、今でも時々思い
出されます。

短歌

吉平町岬短歌会

空を見て鯨雲りを言ひし老が磯に採りしと若布を賜ふ

池田 テル

姿みぬ雀を見たく空を見上ぐ囀り聞きたくいく度も見上げぬ

金子 寿子

浜風に吹かれて泳ぐ鯉のぼりを孫と眺めぬ石ころの海辺に

坂本 信子

日は西に長く静けきたそがれを雲の間に見ゆ円かなる月

鈴木 時子

菩提寺の春の行事を終へし今子等の時代も続くを願ふ

田中 香苗

桜咲く庭の向かふの屋根上の空に真白し積丹岳は

丹後 初江

象と犀鼻と角とを近付けて仲良く居しに象はいま亡く

寺田 清治

夜明け早くなりし朝床に目覚めゐて野菜作らむあれこれ思ふ

東 美知

沖遠く落ちゆく春の日を映し赤く海面の波のきらめく

堀 典子

俳句

吉平俳句会

韃靼の風と云はれて卯波立つ 越野 清治

師の句碑へロシアタンポポ根付きたる 斉藤 波留

カーネーション母亡きあとも母に買ふ 山口 悦子

天狗山海見下ろせば卯波かな 越野 敏雄

若き日の吉野の花を忘れまじ 大和田 絵伊

寄せる波矢車草と遊びをり 高橋 重子

小石にも色のありけり夏の川 仲谷 比呂古

夏潮の月に応へてさざめける 室谷 弘子

踏み出せば草芳しき散歩道 外山 俊久

太陽を引き寄す初夏の大地かな 渡辺 嘉之

鳥啼きて木の間に初夏の風動く 堀 典子

吹流し風を捉へて風に乗る 本間 寿昭

古平浜町郵便局より

古平町ニュース スクラップ集

十一冊寄贈される

浜町郵便局で、古平町に関係する記事・写真をスクラップして、いたものを寄贈していただきました。北海道新聞・北海タイムスから、昭和六十二年から平成六年までのニュースや文芸欄も含まれています。

本格的なスクラップブックに整然と整理されていて、保存の状態

マクワ 2年続きの豊漁

【本報 古平町記者 古平町郵便局より】古平町郵便局より、古平町ニューススクラップ集十一冊が寄贈された。本格的なスクラップブックに整然と整理されていて、保存の状態も良く、大変利用し易い価値の高い資料です。

◆昭和六十二年の新聞◆
大謀網のマクワ、スケトウ大漁の浜の様子が伝えられています。

余市郡漁協・古平漁協61年の水揚げ実績 約450トン 8億7000万円



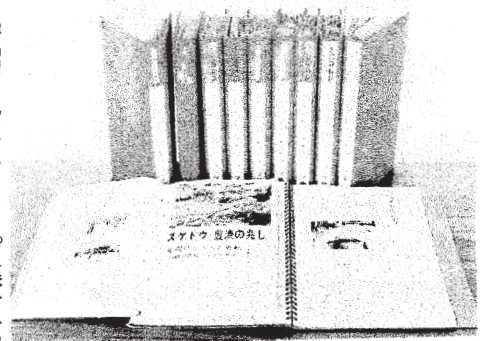
予想を大幅に上回る実績

古平町郵便局より、古平町ニューススクラップ集十一冊が寄贈された。本格的なスクラップブックに整然と整理されていて、保存の状態も良く、大変利用し易い価値の高い資料です。



スケトウ 豊漁の兆し

年明けとともに好転
価格も高めでホクホク顔



ローソク岩 の崩れた日

中村 フミ

これは私の実際に見たことです。私が子供を生んで間もない頃でしたから、昭和三年の九月頃のことだったと思います。

その頃は戦後間もなくでしたから何もものが無く、米はもちろんのこと、何でもヤミ買いをしなければならぬ生活でした。

私はちょうど乳腺炎を患っていましたので、お乳が足りません。それで役場から粉ミルクの配給を受けていましたが、それをなんの知識もないままに赤ん坊に飲ませたのが悪かったのか、大腸力タルになり、蓮実先生に一命をとりとめてもらいました。

そのとき先生から、小樽の病院に行つて診てもらった方がいいと言われましたので、運賃船に頼んで乗せてもらい小樽へ行きました。勇丸という船でした。

病院から帰るときも勇丸でした。その日は波の荒い日でした。

小さい部屋に入っていました。途中まで来たこと。乗組員の一人が、

「あれあれ頭を上げて見れ、いまローソク岩が崩れてるぞ」と言うのです。私もあわてて外を見ました。ほんとうにあつという間のふしぎな出来事でしたが、びっくりしました。

海の上に立っている岩が、山が崩れるのとは違って、きれいに真っ直ぐ下に崩れていくのを初めて見ました。崩れたところは横に割れ目が入ったようにばらばらになって崩れたのです。崩れたのは余市側の方でした。

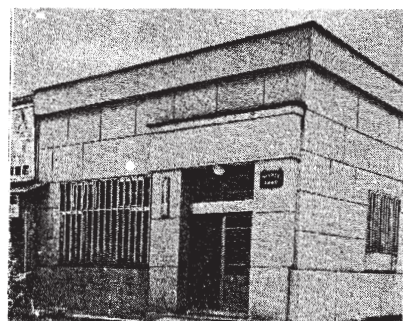
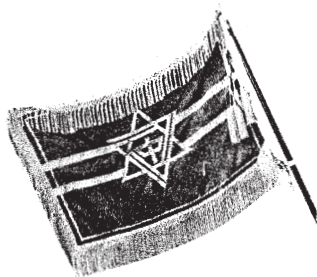
こんな不思議なことを見て、びっくりしたことは今でも忘れられません。

古平町史年表

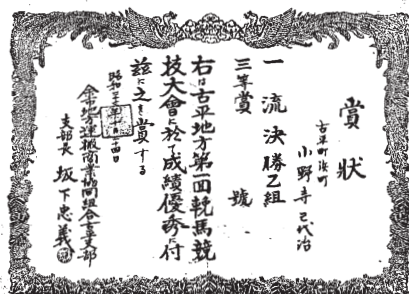
昭和 2 3 年(1948)

- ▲積丹地方開発振興公社が設立される
- ▲古平中学校が校歌を公募し、丸山町吉川義雄の歌詞が当選する
- ▲古平中学校が開校一周年を記念して校旗を制定し、港町吉野金治が校旗を寄贈する
- ▲明和小学校に部落と兼用の電話が架設される
- ▲町内の総ての学校がサマータイムを実施する
- ▲戦後の漁業の復興と発展を図るため、道庁に新たに水産部が、農林省に水産庁が設置される
- ▲古平信用金庫が美国町に美国支店を開設する
- ▲小樽藤山海運株の北海丸(150ト)が、小樽～古平間を隔日運航する
- ▲駐留軍パウス大佐一行が北海丸で来町し、町民の歓迎を受ける
- ▲日本画家で日展委員の今中素友が来町し、禅源寺に止宿して制作する(後に禅源寺境内に歌碑が建立される)
- ▲ホトトギス同人田畑比古が来町する
- ▲ホトトギス同人・『花鳥』主幹伊藤柏翠が来町する
(後に水見悠々子句碑建立有志代表者となる)
- ▲余市～古平間海岸道路建設工事が着工される
- ▲古平中学校が応援歌を制定する
- ▲北海道余市高等学校古平分校(定時制)設立が認可され、古平中学校に併置される
- ▲古平分校開校式が行なわれ、校長に余市高等学校長水島雲平が兼務発令される
- ▲同校専任講師として高橋美喜雄が任命される
- ▲古平地区第1回鞍馬競技大会が中島グランドで開催され、馬券も販売される
- ▲チョパタンの沢国有林で木炭製造が行なわれ、町内に配給になる
- ▲古平警防団が解散する
- ▲小樽～古平間航路に北海丸に代わり金勝丸(70ト)が就航し、収容人員が大幅に増える
- ▲北海道余市保健所が新設され、古平町を管轄する
- ▲「明るい子供の社会をつくる」ことを目指して、新地方面に小学生を対象にスクラム会が発足する

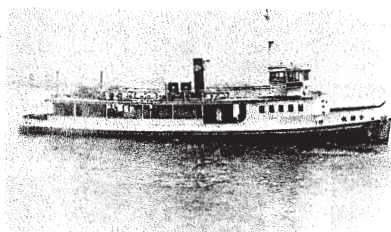
→ 古平中学校校旗



↑ 古平信金美国支店店舗



→ 今中素友歌碑
↑ 第一回鞍馬大会賞状



↑ 定期航路に活躍した金勝丸